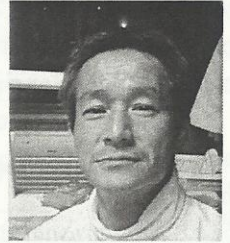


さかな ようしょく
魚の養殖

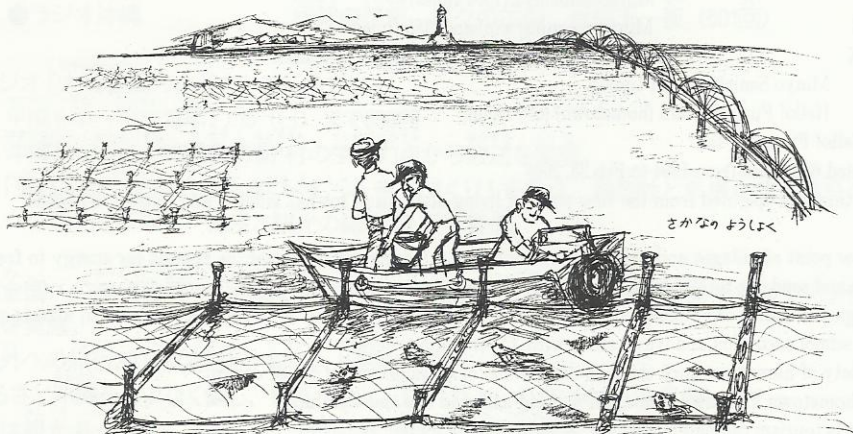
ぎょぎょうくみあいちょう
漁業組合長

よし だ たかし
吉 田 隆



日本列島のほぼ中央、太平洋に突き出した紀伊半島の先端に位置する和歌山県串本町。本州最南端のこの町の沖700メートルにある小島、南紀大島で親子二代に渡り、魚の養殖を営んで47年。この地を表現すると、時に「台風銀座」とか、「黒潮あらい町」などと言われるように、海流の流れは荒く、また、台風の接近や上陸も珍しい事ではないが、魚の養殖場は島陰にあり、対岸の串本との距離も狭い事もあって、比較的に影響はやわげられている。潮流に関して言えば、常に海水の入れ替りが有るので、むしろ好条件と言える。47年前、父が養殖をはじめたころは、わずか2000尾のカンパチからだった。自分で釣ったカンパチに短期間エサをやり売った。本格的な養殖はハマチを飼う様になってからだった。時代は高度経済成長期^(※①)になっていたことも手伝って、育てた魚は良く売れたと言う。ハマチのはこの頃すでに九州、四国では盛んに行われていて、その技術は確立された物になっていたの、この地においても養殖業を始める業者が増加していた。業者のみならず、漁師の中でも捕るから育てる漁業へと養殖に転業する人も多かった。すると、当然の問題として現われてくるのが環境への影響で、自然界の中においては、有り得ない数の魚が養殖イケス^(※②)の中で人から与えられる多量のエサを毎日食べ続けるのだから、当たり前のことと言えよう。

ハマチのエサは生の小魚が主流だった為、食べ残しのカサや小魚から出る油で海は汚れた。更に養殖イケスの網は、そのままでは海藻や貝類が付着してイケス内の海水の循環を悪くする



ので、定期的な交換と手入れを必要とした。この時、網は染料を使い染め直すと耐久性が上がり付着物も付きにくくなるのだが、この染料も海水を汚す要因となった。

海中の環境に悪くなり赤潮の発生も頻繁に起きた。ハマチという魚は赤潮に弱く、魚体に虫が付きやすい弱い魚だったので、ほとんどの養殖業者は、育てる魚をハマチから鯛に転換していった。鯛は日本において、高級魚として扱われていたし、ハマチに比べ丈夫で育てやすい魚だった。しかもエサは人工飼料で十分に大きく育ったので、海への影響も軽減された。しかしその鯛も需要が大きく落ちているのが現状だ。

バブル経済(※3)というある種の狂乱経済の時が過ぎると高級魚、縁起物としての鯛は、もてはやされなくなった。「食」の好みも、魚より「肉」の好む人々が圧倒的に多い現実に対し養殖魚の全体数は以前と大した変化がないとなれば育てた魚は売れ残り、かかったコストより安く売らなくてはならなくなっていった。現在、養殖魚は転換期を迎えている。昔の様に一魚種を集中的に育てるのではなく、多種多様化した消費者のニーズに応えられる様に求められている。

その代表格がクロ鯛かも知れない。鯛は回遊魚ながらも養殖が可能となり、その研究も進められ、今では完全養殖と言って育てた鯛から卵を採取し人工孵化させる技術も完成したと発表されている。10年前、鯛の養殖をしながら鯛も養殖を始め、現在、年間2000尾程度を市場に出しているが、鯛にも問題や課題が多い。完全養殖の稚魚は技術的には可能でも成長の度合いは天然の稚魚に比べ遅い。エサもコストの高い生エサを使わなくてはならないなど、他にも問題は山積みしている。

捕る漁業から育てる漁業へと言われて久しいが、養殖のできる魚種は少なく限られている。農業の様に様々な種を人の手で育てる訳にはいかないが様々な研究も進められている中で、その技術やノウハウは進歩している。私達も新しい技術を現場に取り入れつつ、環境を守りながら、これからも養殖を続けていくつもりだ。

(プロフィール)

- 1959年 和歌山県串本町大島で吉田家の次男として生まれる。親が始めた養殖を手伝いながら地元の串本高校を卒業。
- 1978年 埼玉県にある城西大学経済学部に入学。
- 1982年 同大学を卒業後、すぐに和歌山に戻り、兄と共に養殖業を継ぐ。クロマグロの飼育は国内において前例がなく、試行錯誤を繰り返し、そのノウハウを作った。